

15. あなたがたは十分に気をつけなさい。主がホレブで火の中からあなたがたに話しかけられた日に、あなたがたは何の姿も見なかったからである。
16. 墮落して、自分たちのために、どんな形の彫像をも造らないようにしなさい。男の形も女の形も。
17. 地上のどんな家畜の形も、空を飛ぶどんな鳥の形も、
18. 地をほうどんなものの形も、地の下の水の中にいるどんな魚の形も。
19. また、天に目を上げて、日、月、星の天の万象を見ると、魅せられてそれらを拝み、それらに仕えないようにしなさい。それらのものは、あなたの神、主が全天下の国々の民に分け与えられたものである。
20. 主はあなたがたを取って、鉄の炉エジプトから連れ出し、今日のように、ご自分の所有の民とされた。
21. しかし、主は、あなたがたのことで私を怒り、私はヨルダンを渡れず、またあなたの神、主が相続地としてあなたに与えようとしておられる良い地にはいることができないと誓われた。
22. 私は、この地で、死ななければならない。私はヨルダンを渡ることができない。しかしあなたがたは渡って、あの良い地を所有しようとしている。
23. 気をつけて、あなたがたの神、主があなたがたと結ばれた契約を忘れることのないようにしなさい。あなたの神、主の命令にそむいて、どんな形の彫像をも造ることのないようにしなさい。
24. あなたの神、主は焼き尽くす火、ねたむ神だからである。
25. あなたが子を生子、孫を得、あなたがたがその地に永住し、墮落して、何かの形に刻んだ像を造り、あなたの神、主の目の前に悪を行ない、御怒りを買うようなことがあれば、
26. 私は、きょう、あなたがたに対して、天と地とを証人に立てる。あなたがたは、ヨルダンを渡って、所有しようとしているその土地から、たちまちにして滅びうせる。そこで長く生きるどころか、すっかり根絶やしにされるだろう。
27. 主はあなたがたを国々の民の中に散らされる。しかし、ごくわずかな者たちが、主の追いやる国々の中に残される。
28. あなたがたはそこで、人間の手で造った、見ることも、聞くこともせず、食べることも、かぐこともしない木や石の神々に仕える。
29. そこから、あなたがたは、あなたの神、主を慕い求め、主に会う。あなたが、心を尽くし、精神を尽くして切に求めるようになるからである。
30. あなたの苦しみのうちにあって、これらすべてのことが後の日に、あなたに臨むなら、あなたは、あなたの神、主に立ち返り、御声に聞き従うのである。
31. あなたの神、主は、あわれみ深い神であるから、あなたを捨てず、あなたを滅ぼさず、あなたの先祖たちに誓った契約を忘れない。
32. さあ、あなたより前の過ぎ去った時代に尋ねてみるがよい。神が地上に人を造られた日からこのかた、天のこの果てからかの果てまでに、これほど偉大なことが起こったであろうか。このようなことが聞かれたであろうか。
33. あなたのように、火の中から語られる神の声を聞いて、なお生きていた民があったらどうか。
34. あるいは、あなたがたの神、主が、エジプトにおいてあなたの目の前で、あなたがたのためになさったように、試みと、しるしと、不思議と、戦いと、力強い御手と、伸べられた腕と、恐ろしい力とをもって、一つの国民を他の国民の中から取って、あえてご自身のものとされた神があったであろうか。
35. あなたにこのことが示されたのは、主だけが神であって他には神はないことを、あなたが知るためであった。
36. 主はあなたを訓練するため、天から御声を聞かせ、地の上では、大きい火を見させた。その火の中からあなたは、みこと

ばを聞いた。

37. 主は、あなたの先祖たちを愛して、その後の子孫を選んでおられたので、主ご自身が大いなる力をもって、あなたをエジプトから連れ出された。
38. それはあなたよりも大きく、強い国々を、あなたの前から追い払い、あなたを彼らの地にはいらせ、これを相続地としてあなたに与えるためであった。今日のとおりである。
39. きょう、あなたは、上は天、下は地において、主だけが神であり、ほかに神はないことを知り、心に留めなさい。
40. きょう、私が命じておいた主のおきてと命令とを守りなさい。あなたも、あなたの後の子孫も、しあわせになり、あなたの神、主が永久にあなたに与えようとしておられる地で、あなたが長く生き続けるためである。
41. それからモーセは、ヨルダンの向こうの地に三つの町を取り分けた。東のほうである。
42. 以前から憎んでいなかった隣人を知らずに殺した殺人者が、そこへ、のがれることのできるためである。その者はこれらの町の一つにのがれて、生きのびることができる。
43. ルベン人に属する高地の荒野にあるベツェル、ガド人に属するギルアデのラモテ、マナセ人に属するバシヤンのゴランである。
44. これはモーセがイスラエル人の前に置いたみおしえである。
45. これはさとしとおきてと定めであって、イスラエル人がエジプトを出たとき、モーセが彼らに告げたのである。
46. そこは、ヨルダンの向こうの地、エモリ人の王シホンの国のベテ・ペオルの前の谷であった。シホンはヘシュボンに住んでいたが、モーセとイスラエル人が、エジプトから出て来たとき、彼を打ち殺した。
47. 彼らは、シホンの国とバシヤンの王オグの国とを占領した。このふたりのエモリ人の王はヨルダンの向こうの地、東のほうにいた。
48. それはアルノン川の縁にあるアロエルからシーオン山、すなわちヘルモンまで、
49. また、ヨルダンの向こうの地、東の、アラバの全部、ピスガの傾斜地のふもとのアラバの海までである。

## 説教

十戒の二枚の板に象徴される律法を忘れることなく、一生涯、自分の世界観、人格、存在、生き方のど真ん中にどっかりと据えて、確実に固く守り、守れとモーセは後輩たちに教えました（9 節）。イスラエルにとって律法はいのちなのです。イスラエルのみならず、実は、人類全体、世界中の人々、アダムから今日に至るまで神に造られた人間なら誰にとっても神の律法はいのちです。その人の生死を決めます。神の律法が人を生かします。律法が無ければ、人は神の恵みもみこころも知ることができず、神の前に罪を犯して滅びてしまいます。

15 節以降では、十戒の第一戒と第二戒で禁じられる偶像崇拜について教えられます。神がシナイ山で十戒を人々に与えた時、火の中から語られたけれども、御自身の姿は見せませんでした。神は、姿形を見せることによってではなく、徹頭徹尾ことばによって御自身を啓示なさったからです。それ故、何かの形で神を表現することが禁じられます。すなわち、神の姿だと称する「どんな形の彫像をも造らないようにしなさい」と命じられます（16）。神は天地の造り主です。この世に存在するどんなものにもたとえることができません。なぜなら、それらはみな神が造った被造物なのであって、太陽であれ月であれ、神が恵みによって「全天下の国々に分け与えられたもの」に過ぎないからです（19, 23）。

「あなたの神、主は焼き尽くす火、ねたむ神だからである。」（24）神は一途に人を愛しておられますが、人は

それに応えることなく、浮気をし、神ならぬもの、すなわち偶像を崇拜します。それで、人に対する神のねたみの炎が燃え上がり、偶像崇拜者を焼き尽くすことになります。「たちまちにして滅びうせ」ます。「すっかり根絶やしにされる」のです(26)。

偶像崇拜の本質は、人間中心、自分中心です。一度神を何かの像に見立てて画像や彫像で表現するとします。すると人は、その偶像を拜んで、あとは自分勝手にやりたい放題生きます。なぜなら、その偶像は目があっても見えず、口があっても物を言いません。手足があっても手も足も出ません。それは、死んだ、物言わぬ偶像に過ぎないからです。

しかし、本物の神は生きておられます。人が罪を犯せば、手を下して人の罪を罰します。これは罪だと警告し、悔い改めよと教えるのです。これが神です。この神を正しく知るには、心を尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、全身全霊で、真剣に、神がどういうお方であるかをよくよく考えなければなりません。神の人格の中核、神の人格そのものとも言える神のこぼれをよく考えなければならないのです。要するに、神を中心に生きなければなりません。

それなのに、目に見える偶像を拜む偶像崇拜者は、物言わぬ偶像を拜めばあとは用なしとばかりに、やりたい放題、自分勝手に生きます。神をまるで無視して、自分があたかももう一人の神となったかのようにして、自分勝手に生きるのです。それで、神の怒りを買って「すっかり根絶やしにされ」ます。どうにか滅びを免れる者もいますが、彼らは祖国を失って「国々の中に散らされる」というのでした(26-27)。

しかし、全く悲惨な罪と滅びの状況にも、一縷の望みが預言されます。「しかし、ごくわずかな者たちが、主の追いやる国々の中に残される。」(27) 偶像崇拜の罪を犯して神の怒りを受けて、滅びはどうにか免れたものの「国々の中に散らされる」のですが、それでもその流浪の民のうち「ごくわずかな者たち」が「残される」と言うのです。この「残された民」は、散らされて行った異邦の国々に於いて、当初は「人間の手で造った、見ることも、聞くこともせず、食べることも、かぐこともしない木や石の神々に仕える」こととなります。元々偶像崇拜をしていたのですから神のさばきを受けて滅びたわけですが、惨めに捕囚生活を強いられた先の異教社会で、それこそ異邦人と異教の神々に取り囲まれた偶像一色の環境の中で、本格的に偶像崇拜をする、あるいはさせられることとなります。もともと好きな偶像崇拜を好きなだけ思う存分できるからいいじゃないかと思うのですが、どうも必ずしもそうはならないようです。

続けてモーセは言います。「そこから、あなたがたは、あなたの神、主を慕い求め、主に会う。あなたが、心を尽くし、精神を尽くして切に求めるようになるからである。」(29) 不思議なことですが、偶像一色という異教の環境の中で、当初は存分に偶像崇拜に耽っているものの、「そこから、あなたがたは、あなたの神、主を慕い求め、主に会う」と言うのです。「慕い求め」は「探す、探し求める」、「会う」は「到着する、出会う、見出す」の意味です。つまり、偶像崇拜三昧の生活に嫌気がさしたか、あるいはいつまでもこのままでは良くないと悟ったのか、自分たちの真の神を模索し、探し求め、遂には神を見出す、神に到達するに至ると言うのでした。しかも、それは形・表面だけではなくて、心からそうしたいと心底から願います。「心を尽くし、魂を尽くして切に求めるようになる」結果として神に立ち帰るのです。「切に求める」という言葉は「探求する、調査する、研究する、求める、崇める、立ち帰る」の意味で、神にさばかれて惨めな乞食の捕囚生活を過ごす中で、どうしてこうなってしまったかを探求し、あれこれと調査し、そうして神に伺いを立て、遂にはもう二度と同じ過ちは犯すまいと心底悔い改めて神に立ち帰ることとなるというのでした。それで、次のように解説がつけ加えられます。「あなたの苦しみのうちにあつて、これらすべてのことが後の日に、あなたに臨むなら、あなたは、あなたの神、主に立ち返り、御声に聞き従うのである。」(30) こうして、偶像崇拜の罪を犯して神にさばかれ、惨めな捕囚生活を四十年・七十年「苦

しみのうちにあつて」過ぎしながら、じっくりと反省する中で、「あなたの神、主に立ち返り、御声に聞き従う」よう完全に新しく生まれ変わると言うのでした。

そして、このことは、たまたま偶然そうなるというのではなく、あるいは人間が自分の力によって生まれ変わるというのでもなく、ただ神の「憐れみ」による、とモーセは解説します。「あなたの神、主は、あわれみ深い神であるから、あなたを捨てず、あなたを滅ぼさず、あなたの先祖たちに誓った契約を忘れない。」(31) これによると、罪を犯した神の民が神に呪われた捕囚生活を過ごす中で反省し、「神に立ち帰り、御声に聞き従う」ように新しく生まれ変わるのは、ひとえに神に憐れみによるのです。それも、「わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となる」と先祖アブラハムに「誓った契約」に基づいてそうするというのですから、驚きです。

勿論、神に罪を犯した者全員がそうなるわけではありません。そのほとんどは神の怒りにより「たちまちにして滅びうせ」ます。「すっかり根絶やしにされ」てしまいます(26)。でも、罪を犯した者全員が「たちまちにして滅びうせる」のではなく、かろうじて神の怒りの炎を免れて「残される」「ごくわずかな者たち」がいるのです。これが「残された民」です。彼らとて「たちまちにして滅びうせた」者たちと同様に罪を犯したのです。即座に滅ぼされて然るべきでした。でも、特別な神の憐れみを受けて滅びを免れ、生き残りました。のみならず、惨めな捕囚の「苦しみのうちにあつて」反省し、神のことばに「聞き従う」者へと生まれ変わります。罪の中を歩んでいた神の民が、神の恵みによって新たに再創造されるのです。神に逆らって生きていた者が、神に聞き従う者へと新しく造り変えられます。

モーセの言葉を借りると、これは天地の創造以来、最も「偉大なこと」なのです(32)。神は、あの悪を象徴する大帝国エジプトからイスラエルを奪い取ってご自身のものとされたように、「試みと、しるしと、不思議と、戦いと、力強い御手と、伸べられた腕と、恐ろしい力とをもって」、罪の中に生きている神の民をご自身の懐に奪還されます。こうして、神ならぬ偶像を拝んでいた神の民は、「主だけが神であり、他には神はないことを」思い知らされます(35)。「上は天、下は地に於いて、主だけが神であり、他に神はないことを知り」、「心に留める」、すなわち自分の人生と生き様のど真ん中にどっかりと神を据え、神を中心に生きるようになるのです(39)。「主のおきてと命令とを守り」ます(40)。歴史は神のことばを中心に展開しているのです。神のことばは、守れば生き、逆らえば死ぬものですが、残念ながら、人は罪人であり、誰ひとり神に従い得ません。しかし、神は、その全的に墮落した不従順な罪人に災いを下し、へりくだらせて、主に「聞き従う」者へと生まれ変わらせてくださるのです。

戦時下、日本のキリスト教会は太陽神・天照大神を拝んで偶像崇拝の罪を犯しました。結果、荒野の四十年、バビロン捕囚の七十年を過ごしています。でも、永遠に変わることなく憐れみ深い神は、長年の惨めな捕囚生活の「苦しみ」を通して、何が悪かったかを十分に反省させ、自分中心から神中心の生活へと悔い改めさせてくださいます。「主に立ち返り、御声に聞き従う」よう、新しく再創造して下さっています。そうして、再び、神の民として、神のみこころを行って神の栄光をあらわす者として用いてくださるのです。日本の教会は大きな失敗を犯しましたが、失敗の中でしか得られない恵み(負の遺産と言うべきか?)もあります。勿論、全く失敗せずに神のみこころを行えるようなれたら、それに越したことはありませんが、人間は何一つ神の前に善をなし得ない全的に墮落した罪人であるために、失敗の「苦しみ」を通してでなければまっとうな道を歩むことができないというのもまた真実なのです。

神さまの恵みに心から感謝したいと思います。そして、心から感謝して神のみこころを行う「残された者」でありたい、と心から願い祈ります。